

藤原京右京六条二・三坊、四分遺跡の調査

—第204-2次

1 調査の経緯

本調査は、奈良県橿原市四分町における店舗建設にともなう発掘調査である。調査地は、飛鳥川右岸の沖積地上に位置し、藤原京西二坊大路の推定位置(右京六条二坊・三坊)にあたり、六条条間路の推定位置からはおよそ10m南の地点にある。なお、同地は弥生時代の遺物散布地、四分遺跡の一部でもある。

調査地の近傍では、これまでに数ヵ所で発掘調査がおこなわれている。今次調査地の南方約50mの地点で実施した飛鳥藤原第167次調査では、南北溝SD10930(中世)、南北溝SD10931・SD10933や、掘立柱建物SB10945および土器埋納坑SX10944(いずれも平安時代)を検出している。このうち南北溝SD10930とSD10933は、埋没時期や遺構の位置等の要因により、条坊側溝と確定するにはいたらなかったが、前者は開削が古代に遡る可能性があるとしている(『紀要2011』)。

第167次調査の南方で実施した藤原宮第60-8次調査では、藤原宮期の南北溝SD6570・SD6565、平安時代の南北溝SD6575・SD6579・SD6580を検出しており、西二坊大路の東側溝推定位置付近で検出した前二者に東側溝の可能性を認めている(『藤原概報20』)。また、本調査地の東南方約30mで実施した藤原宮第69-9次調査(中区)では、中世の南北溝SD7680と、同じく中世の溝SD7687を検出した(『藤原概報23』)。

調査は2020年6月23日より開始し、7月29日に終了し

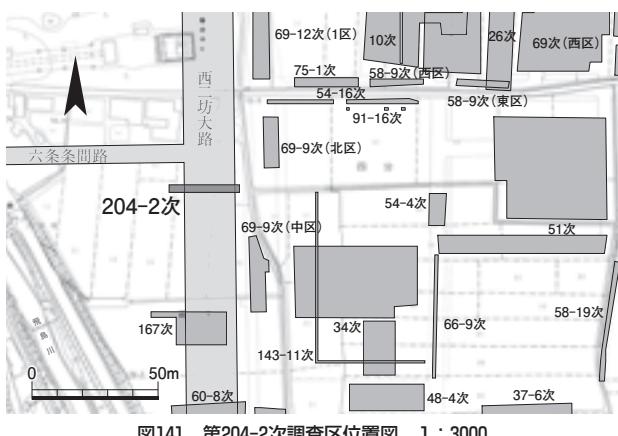


図141 第204-2次調査区位置図 1:3000

た。調査区は条坊遺構の推定位置を考慮し、東西28.0m、南北3.0mとした。調査面積は84.0m²である。

2 検出遺構

基本層序

調査地における基本層序は、上層から順に①耕作土、②黄灰色砂質土(いわゆる床土)、③暗褐色砂混粘質土、④黒褐色粘質土、⑤黄色粘質土である。このうち、②の層厚はおよそ1.0mおよび、中位に水流成の砂層を挟むことから、飛鳥川がもたらした土砂を母材とする水田土壤であると考えられる。ここまで重機にて除去し、遺構検出は③の中位でおこなった。③は④に比し赤味を帯びるが、④の上部が褐鉄等により赤色化したのが③であると考えられる。③は弥生土器と古代から中世の土器片を、④は弥生土器を含む。

古代から中世の遺構

南北溝SD11620 調査区東端で西肩を検出した溝の一部。東肩は調査区外であるが、平面検出の状況やその断面の観察より、南北溝の一部とみられ、西二坊大路東側溝の推定位置にあたる。調査終了間際に掘り下げを実施したもの、安全上の理由により、やむなく完掘を断念した。したがって、溝底は未確認である。検出できたかぎりでは、SD11620は幅1.6m以上、遺構検出面からの深さは0.8m以上である。埋土は上部が黄灰色砂質土、下部が暗青灰色粘質シルトに分かれ。いずれもきわめて軟弱で、掘り下げごとに北壁や東壁に大きな亀裂が生じることとなったため、調査を中止せざるをえなかつたが、人為的な埋立土である黄灰色砂質土から出土したごく少量の土器片には瓦器の小片が含まれていたため、溝の埋没は中世に降る。なお、今次調査区東端の東南方約30mの地点では、中世の溝SD7680とSD7687を検出しており(第69-9次調査中区)、SD11620もこれらに関連するものとも考えられる。

南北溝SD11621 調査区西端付近で検出した南北溝。その上部は中世以降の耕作によって削平され、底部付近をわずかに残すのみである。遺構検出面での幅は約0.8mで、遺構検出面からの深さは約0.2mである。埋土は灰黄褐色砂質土で、鉄分・マンガンの沈着が顕著で、平瓦1点を含む。第167次調査で検出した南北溝SD10933(平安時代に埋没)につながる可能性が高い。なお、第167

次調査で検出した南北溝SD10930に続くとみられる中世の素掘溝は、今次調査では確認できなかった。

弥生時代の遺構

土坑SK11622 調査区中央西寄りの位置で検出した土坑。暗褐色砂混粘質土を削り込んだところで検出した。弥生土器の壺の下半が正位置で出土した。

このほか、暗褐色砂混粘質土上面で遺構が確認できなかった範囲（Y = -18,201～Y = -18,213）において、下層確認のため暗褐色砂混粘質土を掘り下げ、黒褐色粘質土上面での精査を試みたが、遺構は確認できなかった。

3 出土遺物

今回の発掘調査では、整理箱2箱分の土器と、少量の石器が出土した。土器は北排水溝や黒褐色粘質土から出土した弥生土器と、古代・中世の土器とがあるが、いずれも細片が多い。瓦は平瓦2点、丸瓦2点である。このほか、加工木1点、丸棒1点、削片数点、サヌカイト製の剝片・石核や敲石が出土した。

4 まとめ

古代から中世 今回の発掘調査では、当初より西二坊大路の両側溝の検出が期待されており、その候補となる南北溝2条を検出した。ところが、SD11620はその西半を検出したのみで全容があきらかでなく、安全上の配慮から調査も不十分なものとなった。西二坊大路東側溝を踏襲した溝とも考えられるが、埋土からは瓦器片も出土しており、その埋没は中世に降る。

SD11621は、その座標値からみても第167次で検出したSD10933にあたる可能性が高い。その調査成果によれば、「想定位置より少し西に平安時代に埋没した南北溝SD10933を確認」（『紀要2011』102頁）とあり、この溝を西二坊大路西側溝と認定するには難点が多い。今回の出土遺物で時期を決めるることはできないので、第167次調査の所見にしたがい、平安時代の溝と考えたい。

弥生時代 黒褐色粘質土は弥生時代の遺物包含層である。しかし、弥生土器はいずれも細片化しており、出土量も少ない。弥生時代の遺構はSK11622のみで、これ以外に顕著な遺構は確認できなかった。

（森川 実）

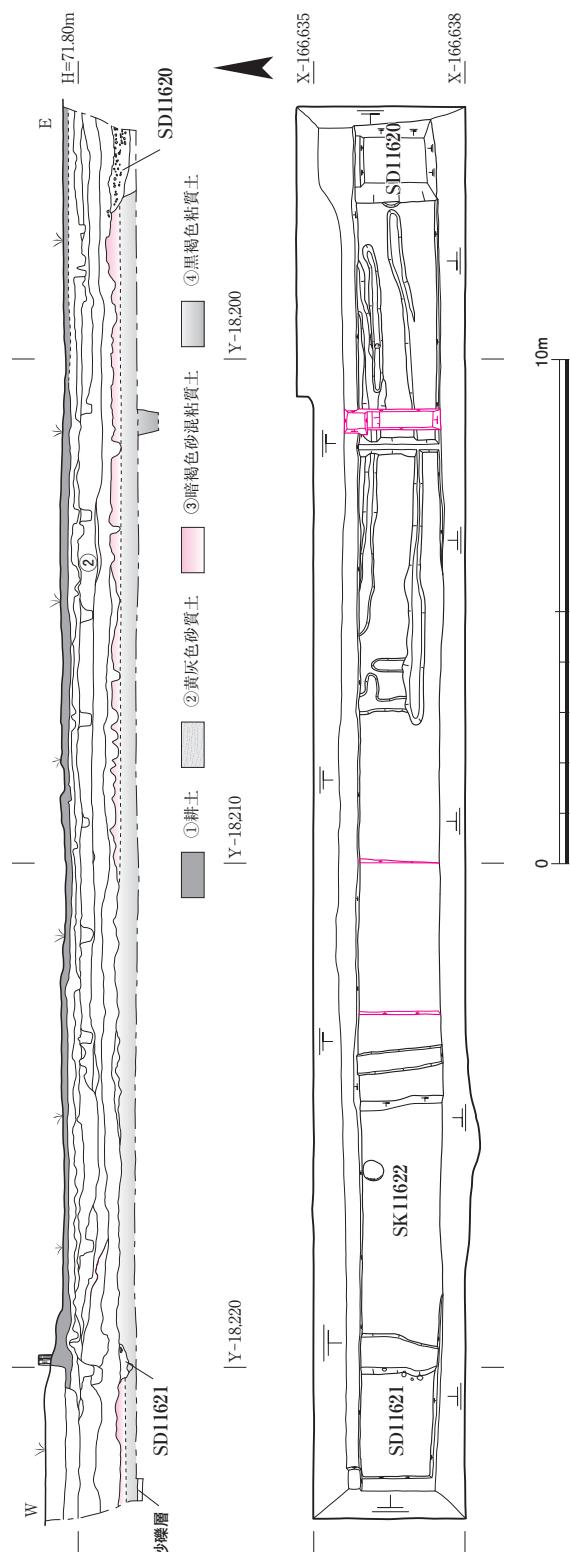


図142 第204-2次調査区遺構図・北壁土層図 1:150